



連載

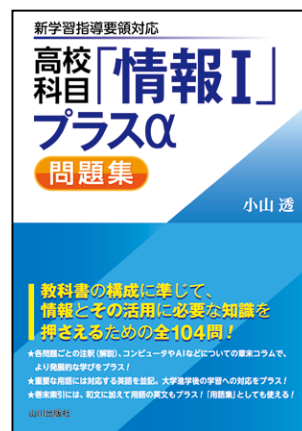
ビブリア・トーク
- 書評 -

… 久野 靖 (電気通信大学)

高校科目「情報Ⅰ」プラスα問題集

小山 透 著

山川出版社 (2024), 1,760 円 (税 10% 込), 248p., ISBN : 978-4-634-05901-56



本書は、書名があらわすとおり、高校の科目「情報Ⅰ」の問題集である。「情報Ⅰ」は、学習指導要領の改訂により、2022年度から共通必修科目として、原則すべての高校生が学ぶこととなった。情報科の20年あまりの歴史の中でも、はじめてプログラミングの内容をすべての高校生に学ばせるようになったこと（それ以前は、複数の科目から1つ以上を必ず学ぶ「選択必修」であり、プログラミングを学ぶ高校生の比率は数%～20%にとどまっていた）、そして国立大学協会が「情報」を大学入学共通テストにおいて基礎的な科目として2025年入試から課すこと（5教科7科目→6教科8科目）の2つが、昨今の大きな変化だといえる。

問題集の類別

高校生でない（またはその家族でない）人にとっては、高校生の使う問題集といってもイメージが湧かないことが多そうである。

書店等でのプレゼンスから一般の人に最も印象に残っているようなのは、「赤本」と呼ばれるものを始めとする大学入学試験の過去問題集であろう。しかし、「情報Ⅰ」はこれから始まる試験であるため、まだ「過去」問は存在しない。そこで現状では、大学入試問題を収録する問題集としては、大学入試センターが「試作問題」等として公開している問題や、別の科目であるが内容が近い「情報関係基礎」の過去問、「情報」を出題してきた大学の過去問、そして著者が用意した模擬問題等を収録するパターンになる。

過去問でなく、すべて著者が作問する、という立場の入試問題集も可能である。ただ、私も本会の情報入試委員会などで模擬試験や問題の研究のため多く作問してきたが、大問（1つのテーマに沿っていくつもの設問が組み合わさっていて、思考力等を見るのに適する）を作るのはかなりの労力がかかるので、多くの大問を含めることは難しそうである。

入試問題という立場をとらない問題集もある。この場合は、「情報Ⅰ」の各分野の内容をバランス良く取り上げ（ものによってはプログラミングなど特定領域に力を入れることもある）、それぞれの分野について用語や意味の理解を見るような問題を収録している。これらの中には、問題の解説というより、各分野の教科書に代わる解説を掲載した「参考書」に近いものもある。

そして、本書は書名に「プラスα」とあるように、上記の「参考書」に近いレベルでありつつ、解説の内容に独自性（教科書等に含まれる「情報Ⅰ」の内容を踏み越えた部分）もあり、興味深い立ち位置にある。

著者の経歴と本書の独自性

上記の「独自性」には著者の考え方が大きく寄与しているので、ここで著者の経歴を紹介させていただく。著者は、東京理科大学理工学部数学科を卒業後、共立出版で編集者の職に就いた。当時、同社はコンピュータ・サイエンス誌『bit』を発行しており、著者はその編集長を十数年に渡って務めた。その後、近代科学社に移り、代表取締役社長を務めた。編集

者としては理工系全般を守備範囲としているが、情報分野については『bit』誌の関係などで多くの先生方と交流があり、著者自ら手がけた著書や翻訳もある。

それで、本書の独自性であるが、最初に出てくる問題が、情報に関する重要語を30挙げて、各々の英訳を書け、というものである。なるほど英訳とは、新しい切口だな、と思わせられた。

その後も、略語（ITとかOSとか）のフルスペルを書かせる問題、短縮語（パソコンとかスマホとか）の和文フルスペルと英訳を書かせる問題、文献で使う省略語（e.g.とかetc.とか）のフルスペルと和訳を書かせる問題、和語の情報関連用語のカタカナあるいは略語（「情報」に対して「インフォメーション」、「情報技術」に対して「IT」など）と英訳を書かせる問題と続き、7問目でようやく意味を問う問題が出てくる、という具合である。

つまり、本書の特徴の1つは、編集者ならではの「言葉に慣れ親しみ、どういう言い替えがあるかをマスターする」という方針で作られていることである。この方針は問題部分にとどまるものではなく、索引がすべて英文併記で和英辞書になっているとか、「注釈」やコラム中の重要語も丁寧に索引に拾われて英訳が括弧書きされていることなどにもつながる。

本書の構成とその世の特色

本書の構成は、学習指導要領と同じく全体を、(1) 情報社会の問題解決、(2) コミュニケーションと情報デザイン、(3) コンピュータとプログラミング、(4) 情報通信ネットワークとデータの活用の4章に分け、各章に26問ずつの間を配置する。各問は見開き2ページに収められ、左ページに問題、右ページに「注釈」と銘打った解説と答が置かれている。

問題は先に述べたような空欄記入のほか、選択肢穴埋め、大きな空欄（「……について書け」という問）がとり混ぜられている。問題のタイプはどれも用語

や概念の意味や当てはめを問うもので（前述の英訳も意味に含めるとして）、基本問題といえよう。選ばれている用語や概念は「情報I」の教科書よりやや広く「プラスα」されている。

解説の中身は問題の解説にとどまらず、関連する話題や概念・用語を「プラスα」して述べてあり、重要語は色を変えて前述のように英訳が付され、ある意味では本書の「肝」（著者が一番伝えたかったこと？）が書かれている。

このほか、各章末には3～5ページのコラムが付され、コンピュータ、インターネット、AI、情報の関連分野について問題に付随した解説では書ききれない内容を記している。そして参考文献、9ページにわたる（前述のように英文併記の）詳しい索引と、70人あまりの人名索引で終わっている。

まとめると本書は、帯に「大学進学後の学習への対応」とあるように、「情報I」の範囲から著者が必要と考えるところまで広げて述べてあることが特徴であり、教科書の範囲ではやや窮屈だと考える人にお勧めだといえる。

重要語の英訳だけでなく意味を尋ねられればより勉強になると思うが、紙面の関係で難しかったと考える。本会情報入試委員会では、各社の「情報I」教科書の用語を整理した「情報科全教科書用語リスト (<https://sites.google.com/a.ipsj.or.jp/ipsjnn/wordlist>)」を公開しており、これの各語の説明文を解答として用いるなら、本書の英訳の問題文を「説明を書け」と読み変えて利用できるのも、興味のある読者には一読をお勧めしたい（各社教科書にある用語の場合）。

(2024年4月15日受付)

久野 靖 (正会員)

電気通信大学 特命教授、筑波大学 名誉教授。理学博士。プログラミング言語、ユーザインターフェース、情報教育に興味を持つ。

